

# 小林高校の伝統の第一歩は この大会から始まった

市体育協会の安樂重則会長は、小林高校が全国初出場をしたときのメンバーの1人。第1回目の大会に参加した選手でもあります。この大会に人一倍強い思い入れをもつ安樂会長に、その歴史と魅力をききました。

## 道路も砂利道で裸足で走った 市民総出の大会だった

こばやし駅伝競走大会が始まったのは、私が中学3年生のころ。その当時は、道路も舗装されておらずほとんどの道が砂利道でしたが、靴もなく裸足で走っていました。大会のときは、先生から女性用の白足袋をもらい走りました。当時は、応援の数も多く市民総出の大会でした。その中を走るのは、本当に気持ち良かったことを覚えています。

## この大会に参加した人たちが 小林高校を全国大会に

この駅伝は、小林高校駅伝部が全国で活躍するきっかけにもなっ

## 地域の絆をタスキに込める それがこの駅伝の最大の魅力

また、この大会は地域の子どもから大人までがタスキをつなぐことも魅力の一つです。走らない人も応援という形で参加しています。タスキには、地域のすべての人の絆や温もりが込められてい

## 市体育協会会長 安樂重則さん

て、それを繋ぐことでより地域の愛を深めてきたのだと思います。

## 伝統という名のタスキを これからも繋いでいきたい

自治体が行う駅伝でこれほどの伝統と歴史がある大会はなかなかありません。まさに、「駅伝のまち小林」の原点だと思えます。だからこそ、この伝統という名のタスキを絶やすことなく、市民全員でつないでいかなければなりませんね。



安樂さんは九州一周駅伝にも出場。10年間で36回出場し、18個の区間賞を獲得するなどの活躍をみせています。

## インタビュー

駅伝のまちの伝統を受け継ぐ子どもたち。駅伝の素晴らしさを次の世代に教えている指導者。それぞれの思いをインタビューしました。



小林中陸上駅伝部3年  
やまぐち たいち  
山口 大智さん

## 小さなころから憧れていた 全国で活躍する選手に。

小さいころから駅伝があると、家族と一緒に沿道で応援をしていました。駅伝を走る人に憧れ、小学生のころから陸上を始めました。現在、小林高校駅伝部に入るため、勉強や競技に取り組んでいます。目標は、インターハイや全国高校駅伝で活躍する選手になることです。これからも、もっと練習してこの目標が達成できるようにがんばっていきます。

## 子どもたちの成長は 地域の支えがあるからこそ

紙屋地区は、こばやし駅伝競走大会に毎年2チームエントリーしています。それは、「少しでも多くの子どもに駅伝を走ってほしい」と地域住民が協力しているからです。このクラブの子どもたちは、こういった支えがあり成長しています。速く走ることだけでなく、チームのため、地域のためにがんばることの大切さを伝えることが指導者としての責務だと思っています。



紙屋陸上クラブコーチ  
はるよし  
井手 春好さん

# 66年間つながれてきた伝統 いつまでもつないでいく

## 駅伝のまちを築きあげたのは まちを盛り上げたいと思う心

「駅伝のまち小林」。このように言われているのは、全国大会常連校の小林高校駅伝部があるからと思っている人は多いのではないのでしょうか。しかし、歴史を振り返ると、「こばやし駅伝競走大会」があったからこそ、小林高校駅伝部は生まれたのです。大会は、走る人だけでなくサポートする人、応援する人など全員がまちを盛り上げたいと思い協力してきました。そして、それが「駅伝のまち小林」の伝統を築き上げてきたのです。

## 66年続く伝統という名の襷 次の世代へとつないでいく

時代は移り旧須木村・旧野尻町と合併し、新小林市になってもその伝統は引き継がれ、すべての地区が、この大会に参加しています。



紙屋地区のように、「子どもにも駅伝を経験させたい」と協力している地域もあります。「地域やまちが駅伝で一つになる」。小林にとって駅伝は、スポーツという枠を超えたものになっています。66年もの間、繋がれてきた「こばやし駅伝競走大会」という名のタスキ。それは、このまちの「誇り」です。だからこそ、その誇りを忘れず、これからも次の世代へとこのタスキをつないでいきましょう。

## インタビュー

全国高校駅伝、箱根駅伝やニューイヤースタートなどの日本最高峰の大会に出場してきた、市出身の陸上長距離選手野脇勇志さんに話を聞きました。



小林高校駅伝部OB  
トヨタ紡織陸上部  
のわき ゆうし  
野脇 勇志

### 初の駅伝、そして区間賞 駅伝への思いが強くなった

小学6年のときに出場した市内一周駅伝（現：こばやし駅伝競走大会）が、初めての駅伝でした。人生初の区間賞を獲得したこともあり、とても印象に残っています。それまで野球をしていましたが、中学では駅伝をやってみようという思いが強くなり、陸上部に入部しました。中学卒業後、小林高校の駅伝部に入部し、インターハイや全国高校駅伝など走らせていただきました。多くの市民の皆さんに支えられ、応援してもらったからこそ出場できたのだと思っています。現在は、トヨタ紡織陸上部に所属しており、日々練習に励んでいます。今後、育ててくれたふるさと小林への感謝の気持ちを忘れず、マラソンに挑戦して世界で戦える選手になれるようがんばります。



写真/第2回(昭和27年)大会中学部の優勝(永久津)記念

特集/こばやし駅伝競走大会

# 伝統のタスキ いつまでも。



今年で66回目を迎えるこばやし駅伝競走大会。

小林高校駅伝部が全国で名を馳せる前から続く歴史ある大会です。

「駅伝のまち小林」と呼ばれるようになったのもこの大会があったからこそ。

今月号では、こばやし駅伝競走大会を紹介します。

体の小さかった子どもたちの  
体を駅伝で作りがえる

昭和25年。小林町が小林市になり、市制施行記念として開催されたイベントが小林市内一周駅伝（現：こばやし駅伝競走大会）でした。この大会の発起人は、当時、永久津中学校で校長を務めていた

植田一郎さん。植田さんの著書「小林市内一周駅伝」には、駅伝を開催した理由が書いてあります。

当時、小林の子どもたちの体は、全国平均を大きく下回っていました。その改善のために、スポーツで体を作り替えることが必要だと植田さんは考えました。当時、人気のスポーツは野球でしたが、グ

ラウンドもなく、金銭的にも実現はできません。そういった中でもできるスポーツが長距離走だと考え、駅伝大会を開催することになりました。

「駅伝のまち小林」は  
全市民で築き上げてきた

また、同書では岡藺助左エ門元市長が駅伝のまちの発足について書いてあります。  
『特にこの市内一周駅伝が発端

となって小林高等学校駅伝大会の度重なる全国優勝の榮譽を生み、又九州一周駅伝宮崎県チームの強力なメンバーを育成していく等立派な実績を積み上げていってくれました。  
このまちの駅伝の歴史は、一部の限られた選手たちだけで作られたのではなく、こばやし駅伝競走大会に出場、応援する全ての人たちによってつくられたもの。今月号では、実際にこの駅伝に関わる人たちに話を聞きました。



「小林市内一周駅伝」。第1回から第33回までの記録や当時の大会の様子が掲載されています。

【参考文献】植田一郎（1985）「小林市内一周駅伝」（鉦脈社）